

会員生協のボランティア活動紹介

福井県庁生協

季節の花々でおもてなし

50年ぶりとなる県内の国体「福井しあわせ元気国体・大会」が9月から10月にかけて、福井運動公園競技場を中心に行われました。

国体の期間中、地元の緑苑公園が国体関係者皆さまの駐輪場になることから、緑苑地区壮青年会としましては、駐輪場を利用される皆さまを季節の花々で歓迎するため、7月15日(日)にマリーゴールドなどを公園内の花壇に植えました。

作業は猛暑の中で行われましたが、壮青年会のほか子ども会役員の皆さん、婦人会の皆さんにもご協力いただき、約3時間を掛けて900株の植栽を終えることが出来ました。夏休みの期間中は、小学生児童たちのラジオ体操の後に子ども会役員皆さん、休日は壮青年会の役員たちが朝の水やりを精を出し、大切に花々を育て、花壇の管理を進めてきました。



▲植栽作業の様子(2018.7.15)緑苑公園

お陰様で、国体期間中は花々が満開となり、きっと歓迎とおもてなしの心が伝わったことと思います。緑苑公園も関係者皆さまの自転車でいっぱいになりました。

その他、この花壇については、福井県森づくり課が主催する「はびりゅう花壇コンクール」に応募。審査の結果、見事入選となりとても喜んでます。



▲国体前に歓迎の意を込めて看板を設置(2018.9.17)緑苑公園

菅浜生協

9/5東京都修徳中学校炭焼き体験開催

9/5(水)東京都修徳中学校35名の炭焼き体験が行われました。最初に浜野健治さんより森の大切さ、炭焼きの歴史、炭ができるまでの過程につき説明があり、その後チェーンソーによる木の切断、炭材の窯入れ、出来た炭の箱入れを順番に体験しました。体験後はバーベキューと浜野さん秘伝の猪入りの味噌汁を堪能して、身も心も腹一杯となり、次の目的地石川県へと移動しました。



福井県生協連合会では、会員生協(組織または役職員・組合員)が行っているボランティア活動に対して助成金をお渡しし、活動を応援しています。

福井県医療生協

身体を動かし餅を食べて楽しく交流

あわら市清間地区で高齢者が集う介護予防拠点施設「やすらぎ清間」において、昨年12月6日に恒例の「もちつき交流会」が行なわれました。毎年楽しみに待っている利用者さんなど58名の参加者が集いました。「やすらぎ清間」の屋外ではテントの中でボランティアさんと伊井こども園の園児も杵を持ってもちつきに参加し「おろし、きなこ、つぶあん」にまるめられ参加者に振る舞われました。屋内でも健康体操で身体を動かし、園児による歌の披露と参加者とのふれあいタイムが作られ、みんな笑顔で楽しく交流しました。



福井県民生協

「桜ライン311」の植樹ボランティアに参加しました

東日本大震災で津波が到達した地点に桜を植樹して後世に地震・津波の怖さを伝承しようという目的からスタートした岩手県陸前高田市のNPO「桜ライン311」の植樹活動に、2018年11月17日(土)、職員4人、組合員2人の6人で参加してきました。

3回目の今回、県民せいきょうはオオヤマザクラという3m近い大きな桜を3本植樹。参加した職員からは「十分高台と思えるこんな所まで津波が来て、多くの方がなくなったことに驚きました。この桜が被災地の人々の心を癒すと同時に震災のことを忘れないで防災のきっかけになって欲しいと感じています。」という感想がありました。

この3年で計11本の植樹ができました。今後も可能な限り継続していきたいと思えます。



平成30年度

福井県総合防災訓練に参加

日時

11月10日(土) 9:00~11:15

訓練想定

台風による大雨および地震により、特に永平寺町では家屋の倒壊や火災が多数発生し、ライフラインが麻痺。さらに大雨、地震複合災害により土砂災害、河川の氾濫が発生。

県庁内に県災害ボランティア本部が、永平寺町に現地災害ボランティアセンターが設置され、生協連は災害ボランティア本部に配属されて訓練に参加しました。

現地災害ボランティアセンターからの要請に基づき、スコップや一輪車、高圧洗浄機などの物資調達を担当しました。現地の災害ボランティアセンター職員から、訓練のシナリオに掲載されていない物資調達に関する電話を受け、他のメンバーと議論しながら対応する場面もありました。

訓練終了後、今後もさまざまな場面を想定した訓練の必要性を参加者で話し合いました。



収集ボランティアにご協力ありがとうございました

ボランティア月間で収集された使用済み切手・ベルマーク・外国コインは、福井ボランティアセンターを通じて次の団体に寄贈され、役立てられています。また、書き損じ葉書は福井県内の福祉施設法人へ寄贈しています。

収集物	量
使用済み切手	2,350g
ベルマーク	651.5点
書き損じ葉書	16枚
外国コイン	国:8カ国 コイン枚数:62枚(200g) 他に日本の古銭も

3.11 を忘れない

～復興を担う女性たち～

亘理町の文化から生まれた手作り雑貨。株式会社 WATALIS ビジネスとして長く続けていきたい。

みやぎ生協から被災地・宮城のいまをお伝えします

亘理町は町面積の約半分が浸水し、8万人が避難しました。震災から数カ月後、引地恵さんは町内でコミュニティづくりのためのワークショップを始めました。

亘理町には着物の残り布でつくった巾着袋にお米などを入れて感謝を伝える返礼の文化があります。引地さんは、その巾着袋を地元の女性たちの手で再現し、着物リメイク雑貨として販売していこうと考えました。ワークショップに集まった地元の女性たちとともに和裁の先生の指導を受けながら、手作りの巾着袋を「商品」として送り出せるよう、腕を磨きました。

2015年、引地さんは大きな決断をします。着物リメイク雑貨の製造販売をコミュニティ活動から切り離し、新たにつくった株式会社 WATALISへ移したのです。販売したお金で材料を仕入れ、作り手に製作費を支払い、経費をまかなう。そんな当たり前の「ビジネスとして事業を続けるためでした。



▲巾着袋は地元の女性たちが少し誇って「ふぐる」と呼んでいたことから「FUGURO」と名付けられました。(写真提供:株式会社WATALIS)

「コミュニティ活動と並行して取り組んでいたのが、着物リメイク雑貨の製造販売も、震災後の一時的な仕事づくりと見られていました。商談に赴くと、「きちんと供給できるのか」「納期は守れるのか」と信用を得る難しさに直面しました。「震災から時間が経っているので、もう扱わ

い」と言われたこともありました。

「素人に会社経営は無理だ」と危ぶむ声もありましたが、引地さんはビジネスコンペに応募して受賞したり、ウェブ上に販売サイトを開設したりするなど積極的に道を拓きました。作り手さんに縫製を仕事として続けるかどうかを確認し、一層クオリティの向上に努めました。

株式会社 WATALISの事業は地元の友人知人や震災後につながった人々の応援を受け、着実に歩みを進めてきました。従業員は現在、作り手を含めて12人。アクセサリや小物雑貨など商品の種類も増えました。WATALISは亘理町のワタリとお守りの意味の TALISMAN(タリスマン)を組み合わせた造語です。「商品を手にとっていただくことで亘理町に関心を持っていただければ嬉しいです」。

故郷で生まれ故郷を伝える地場産品は、地域経済の担い手になります。「長く続けることで地元へ少しでもお金が入り、活気が生まれる。そういう道を目指していきたい」と引地さんは願っています。

※株式会社 WATALIS <http://watalis.co.jp/>



▲引地恵(ひきちめぐみ)さん。2016年、「ちょっとお洒落して集える場がほしい」との要望に応え中町カフェをオープンしました。様々な商品を手にとって見ることもできます。